

ロチェスターにおけるリベルタンの精神

著者	生田 省悟
雑誌名	県立新潟女子短期大学研究紀要
巻	15
ページ	45-61
発行年	1978-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/42839

ロチェスターにおけるリベルタンの精神

生 田 省 悟

(1978年1月17日 受理)

Libertine Elements in Rochester's Love Lyrics

Shogo Ikuta

愛について想う時、人の心には微妙で複雑な襞が刻み込まれる。そして恋愛詩が誕生する。古典古代以来、詩人達は人間存在の事実としての魂と肉体という両極の間で、愛における経験とそれに伴う感情や思念を詩的営為によって自分自身のことばに還元させてきた。また数多くの作品が書かれるのに呼応して、恋愛詩には互いに交差し合う、さまざまな系譜が形成されていったのである。その恋愛詩の豊かな伝統を背景にした時、愛をうたう饒舌さの度合いにおいて王制復古期はエリザベス朝に匹敵するほどであった。

本稿は王制復古期における一群の恋愛詩に共通する基本的な性格を踏まえた上で、その時代にあって卓抜した個性を所有していたひとりの詩人、ロチェスターの作品のあり方とその意味を考察するものである。

1

ある時代特有の精神や風潮が一箇の人間のうちに明確な形で反映される場合があるとするなら、1680年7月、33才で生涯を終えたロチェスター伯ジョン・ウィルモット (John Wilmot, Earl of Rochester) は少くとも王制復古期の一端を具現する人物であった。彼の生活圏であったチャールズ二世の宮廷は、周知のように、洗練された優雅さ、機知と皮肉とによる軽快さ、そして淫蕩な放縦さに浸り切っていた。そのような空気を呼吸しつつ、宮廷に群っていた有象無象の廷臣達、その中でも無類の放蕩ぶりと針に似た知性の故にロチェスターは極立った存在であったという。

しかしながらロチェスターがある意味で王制復古期の申し子であったというのは、視点を変えると、彼がいかにその時代から制約を受けていたかを示すことにもなる。彼の個性は彼を取り巻く、ある同質的な状況を認識して初めて理解されるべきなのであって、これは彼の作品といえども例外ではない。チャールズ二世の廷臣でもあり詩人でもあった貴族階級を称して「宮廷才子 (Court Wits)」と言ったのは J. H. ウィルスンだが、彼は「宮廷才子は同一の手法で詩作する傾向にあった。彼ら全てを研究せずにおいて、ひとりの才子を研究しようとしても、それは難しい」とも述べている¹。実際、

貴族達の作品に限らず、この時代に書かれた詩を読んでその作者を言い当てるのは非常に困難だという感じにさせられる場合が多い。その程度までに詩人達はある共通の傾向を所有しながら、各自が詩作していたと考えられる。そこで彼らの共有していた同質的なものとは一体何であったのかを考えることから始めよう。J. H. ウィルソンの指摘に従うなら、この手続きを取ること自体がロチェスター理解の第一歩にもなっている。

II

1660年5月29日、国民の熱狂的な歓迎を受けながら、チャールズ二世はロンドンに帰還したという²。しかしながら清教徒と王党派との血腥い抗争と内乱、それに続く共和制の時期を経て訪れたこの王制復古期は決して平静な時代ではあり得なかった。依然として残る内乱の余韻は政治上の具体的な問題となって現われていたし、あるいはオランダとの緊張関係などを課題としていたのである。言わば深刻な内憂外患を抱えていたと考えられる³。ところがそのような状況下でありながら、宮廷では極端に享樂的な生活が繰り広げられており、しかも国王が率先してその範を示していたという。日記作者ピープスはチャールズその人や貴族階級の放縦さについて、失望の念を込めながら日記の中で再三述べている⁴。しかもピープスの不満は彼ひとりだけのものではなかった⁵。

批判を他所に欲楽を求めてやまない宮廷での生活、それを表現するのに相応しいのはリベルタ的な態度ということばであろう。「リベルタン(libertine)」とは元来16世紀初期のフランスにおける宗教上の自由主義者を指すものである。だがここで言うのはその派生的な意味、即ち社会慣習や因襲的な道徳律に束縛されぬ自由を謳歌し、常に快楽を求めようとする人間という意義においてである⁶。貴族階級の生活原理としてのリベルタ的な態度、それは第一義的には宮廷に漂う独特な雰囲気依っている。だがリベルタンの存在を許容する契機はこの時代それ自体にあったのではないだろうか。社会状況から見て、王制復古期は決して安定していなかったと先程も触れたが、それと呼応すべき精神風土を考えてみる必要がある。

よく言われることだが、神中心の象徴体系を基盤とする世界観が17世紀において、その根底を揺がされるに到ったという。その影響が直接的作用を及ぼしたのが王制復古期においてではなかったか。伝統的な秩序に基く思考方法の崩壊していく過程と並行して、ホッブスやデカルトの説く合理主義が次第に浸透していったのもこの時代である。その経緯を代弁するのが、数学的明晰さを旨とする王立協会の設立であつたろう。精神史という脈絡に位置づけるなら、王制復古期は新たな世界観を前にした過渡期であった。普遍としての統一された価値観が侵食を受けて正当な基準を失ない、あらゆる面で価値の相対化という現象が生じていたのである。人間の視点が普遍から個へと転換されていく過程にあって、混沌とした多様性だけが浮び上がっていた時代だと言える⁷。

錯綜した時代に生きる人間が、自己の存在を支える絶対的なものを喪失した故に懷疑主義に陥っていたという指摘も行なわれている⁸。時代に対応できず、形骸化した格言などを持ち出して、「今の時代は狂っている」⁹としか言えずにいる人間や、徒らに時勢に押し流されている人間の姿が文学作

品に現われてもいる¹⁰。王制復古期のそのような状況から人間即ち実体の無い存在という認識が生まれてくる。

Hold then, my Muse, 'tis time to make an end,
Lest taxing others thou thyself offend.
The world's a wood in which all lose their way,
Though by a diff'rent path each goes astray.

(Sir Carr Scroope, "In Defense of Satire," 11. 107-110)¹¹

ここでは森としての世界に迷う人間が端的に描かれている。何の指標も与えられていない人間は愚行を繰り返すしかないことを詩人は見抜いているのである。他者との連帯が分断されたまま、無目的にうごめく人間像は王制復古期の精神風土を如実に物語っている。過渡期という状況にあって、個人の存在の基盤を喪失している事態こそリベルタンが誕生する最大の契機であった。

過渡期に起因するリベルタンにとって、生の論理といえるものは感覚と快楽とに集約される。

Time, to define it, is the space
That men enjoy their being;
'Tis not the hour, but drinking glass,
Makes time and life agreeing.

(Charles Cotton, "Clepsydra," 11. 37-40)¹²

これは自己の在り処を定め得ない虚しさを映し出している。ひたすら快楽を求めることで生を規定しようとする心情はそうした不安感を裏打ちするものである。感覚だけが自己に直接的な係わりを持つ確かなものなら、その感覚の充足こそが全てなのだとする論理はリベルタンに特有のものであろう。リベルタンの精神の本質は感覚に支えられた欲望のうちにあったと言える。常に自己の感覚に立ち返ることが要求され、かつそこからあらゆる経験が構築されなければならなかったのである。感覚は個人の所有物であり、人は自分自身の感覚だけを理解する。放縦な快楽が標榜された所似はこの点に掛っていた¹³。

ところで次のような一節からは何を読み取るべきなのであろうか。

Joyning thus both Mirth and Beauty,
To make up our full Delight:
In Wine and Love we pay our Duty
To each friendly coming Night.

(Sir Charles Sedley, "Song," 11. 13-16)¹⁴

ここに描かれている態度は快楽追求の原則と完全に一致する。即ちリベルタンの大半が抱いていた心情が表現されているのである。だがこの大胆な自己表示を読む時、余りにも感覚的な生活に埋没している精神をも見出さずにはいられない。重要なのはリベルタンの発生を必然化した要因が、そのまま彼らの存在を正当化する理由にはならないことである。なぜならリベルタンとしての生を標榜するのは、個人の実体を構成している意識に関係しているからである。換言するなら、彼らが時代の性格を認識し、生の倫理への問い掛けを経ることによってリベルタンの態度を取ったのかという問題が生じてくる。例えばロチェスターの友人でもあったエセリッジがドイツ滞在の折、ロンドンを想って "Who (I) have been bred in a free nation,/With liberty of speech and passion"¹⁵ と述べているが、彼がリベルタンとして名を馳せたひとりであり、かつ "The pleasures of love and the joys of good wine,/ To perfect our happiness wisely we join."¹⁶ と別の作品に書いているのを考慮すると、彼の讃美している「自由」は単純には割り切れない。むしろ快楽に安住していた人間の哀れな夢が彼の回想に感じられるのである。エセリッジのことばはリベルタンの認識の次元を浮き彫りにしている。放縦な生活に従うことが、自己の経験の意味や価値を内省する過程を伴っていたのかという点に関しては、多くの場合否定的な答えになるであろう。リベルタンの殆どは盲目的に「酒、女、うた——不敬なる三位一体」¹⁷ を崇拝していた。あるのは快楽の虜になっている姿ばかりで、主体としての人間が不在なのである。王制復古期のリベルタンはこうした意識の上の不連続という自己矛盾を犯すことによって快楽を享受していた。しかもその矛盾が恋愛詩の成立する母胎にもなっている。

Ⅲ

J. サザランドは王制復古期について、「宮廷が文学に対して真に影響を及ぼした数少い時代のひとつ」¹⁸ であると言っているが、リベルタンの存在は文学の動向と緊密に結びついている。自らが生きた王制復古期を「非常に陽気で、踊り狂い、酒を浴び、喧噪に明け暮れ、何も考えなかった時代」¹⁹ と裁断したというドライデンの作品にさへ、リベルタンのものがかすかに反映されている。

Ah how sweet it is to love,
Ah how gay is young desire!
And what pleasing pains we prove
When we first approach Love's fire!
Pains of Love be sweeter far
Than all other pleasures are.

(John Dryden, "Song" from *Tyrannick Love*, 11. 1-6)²⁰

何の変哲もない一節だが、軽快に語られている愛の悦びには注目したい。愛の痛みは実に快いものであり、「他の全ての快楽」との比較から明白なように、快楽という領域で考えられる必要があったのである。ドライデンの表現をさらに発展させた詩人もいる。

Haste, Celia, haste, whilst Love invites,
Obey the gentle Godhead's Voice;
Fill ev'ry Sense with soft Delights,
And give thy Soul a loose to Joys;
Let millions of repeated Bliss prove
That thou art Kindness all, and I all Love.

(Matthew Prior, "Verses by Mr Prior," 11. 43-48)²¹

穏やかながらも性的な含みを匂わすこの一節には、深刻さというものは存在しない。欲望は優美な論理で伝えられ、来るべき愛の行為はやはり快楽として理解されている。「あらゆる感覚を甘美な悦びで充しなさい」ということばに典型的に表現された詩人の精神はリベルタンのあり方に対応しているのである。恋愛詩において、愛は常に快楽を求めるという形式で表現されており、恋愛体験は専ら皮膚感覚に作用する肉体的、官能的な充足感を媒介にして実現されなければならなかった。

愛を肉体の領域で終始させる精神は感覚の得る悦びという究極の目的を期待する作品を産み出すのだが、その傾向は時には独白や夢想を装って殊更顕著に語られる。

This Bess of my heart, this Bess of my soul,
Has a skin white as milk, and hair as black as a coal;
She's plump, yet with ease you may span round her waist,
But her round swelling thighs can scarce be embrac'd;
Her belly is soft, not a word of the rest:
But I know what I think, when I drink to the best.

(Charles Sackville, Earl of Dorset, "Song," 11. 6-12)²²

女性の肉体の各部分に関する羅列を最後に曖昧なものにすり変えることで、詩人は性的な連想が一層増幅される効果を狙っている。この一節、特に最後の行は王制復古期の恋愛詩の一面を如実に示していると思われる。即ち人間経験に陰影と奥行きとを与える感情は全て捨象され、具体的な願望だけが強調されているのである。あるいは女性の立場を仮定して、官能的な行為の絶頂感へと促される気持をあからさまに述べている作品も見受けられる。

How long I shall love him, I can no more tell,
 Than had I a fever when I should be well.
 My passion shall kill me before I will show it,
 And yet I would give all the world he did know it;
 But oh how I sigh when I think should he woo me,
 I cannot deny what I know would undo me!

(Sir George Etherege, "Song," 11. 7-12)²³

自分自身が、あるいはむしろ自分の感覚が強烈に刺激されることを望む心は快楽そのものしか考えられない。この詩行の最後が先に引用した一節のそれと酷似したものを表現しているのに注目したい。愛についてうたう詩人達の精神や想像力はさまざまな軌道を描いてはいるけれども、唯一の目標に向かって運動しているのである。あらゆる経験において快楽を求め、感覚の味う陶醉に浸ることを望む衝動的な思考形態こそ、前にも述べたように、リベルタンの特質に他ならない。詩人達は何のためらいもなく、それを恋愛詩の世界に導入したのである。彼らの記述する愛は肉体における事実へと傾斜するばかりであった。

R.トリケットに依れば、リベルタンにとって「愛は基本的にひとつの欲望であり、それを満足させることは優しさよりも退屈さを喚起することの方が多かった」のである²⁴。この指摘はリベルタンが愛に官能的な悦びを求めたことを相反するものではなく、王制復古期において理解されていた愛の位置を鋭く言い当てている。愛の成就が退屈さを産むのなら、それを如何に克服して快楽の度合いを更に高めればよいのかということが主要な関心事になる。この果てしない欲望の昂まりを論議するのは、詩人達にとっても楽しい課題になっていた。

Do not be won too soon I prithee,
 But let me woo, whilst thou dost fly me.
 'Tis my delight to dally with thee,
 I'll court thee still if thou'lt deny me;
 For there's no happiness but loving,
 Enjoyment makes our pleasures flat;
 Give me the heart that's always moving,
 And's not confin'd t'one, you know what.

(Alexander Brome, "The Contrary," 11. 9-16)²⁵

この一節の論理に従うなら、余り従順になってもらっては困るのであって、あなたを説得するところに楽しみがあるのだから、私を拒絶する真似をして欲しいのだという次第になる。しかも願望がいと

も容易に達せられると悦びは味気なくなってしまうのだと主張することばは、常により濃密なものを要求せざるを得ない欲望の性格を示唆している。こうした擬似的な愛の儀式についての論議は巧妙なのだけれども、愛が官能的な快楽を得るための、ある種の遊戯に過ぎないのだという意識も潜在しているのである。愛に遊びの要素を見出すこと自体は極めて自然な現象であろう。しかしながらその遊戯の図式のみを詳説するところでは、恋愛体験は人間にとって意味をなさない。この一節には、そのような状況に陥ってしまった愛の極端な様相が露呈されているのである。リベルタンが到達すべき必然的な事態のひとつであったとも言えるだろう。

これまで見てきたように、王制復古期の恋愛詩はリベルタンの精神に基いて成立している。恋愛体験は性的で官能的な行為そのものに限定され、感覚の充足による快楽だけが価値あるものと見做されていたのである。詩人達はこのような態度を具体的な局面に応じて迎えることに専念していた。彼らの作品における描写と論議は滑らかで軽快な口調を軸として展開されていたり、あるいは露骨なまでのリアリズムの手法に依ったりしたが、時には双方が相乗的に作用している場合もあった。しかしながら愛を正面から見据えて、その人間経験としての本質を徹底して分析し、評価するような姿勢を詩人達は所有していなかったのである。恋愛詩は快楽を求めるという即物的な認識をありのままに表現している形態の詩であって、それ自体が「不敬なる三位一体」の構成因となるべき、ひとつの遊戯であり、気晴らしでもあった。一篇の恋愛詩を書くことは、リベルタンの風潮に埋没していた詩人達にとって、自己の精神を検証し、深化させて、ことばに昇華させる場を獲得したことにはならなかったのである。王制復古期における恋愛詩群に共通する特質を抽出するなら、以上に要約される。それは軽佻ではないにしても、余りにも脆弱な文学であった。

IV

他の詩人達の作品と同様に、ロチェスターの場合にもリベルタンの精神が現われている。当時の詩風は彼にとって非常に親しいものであった。

When innocence, beauty, and wit do conspire
To betray, and engage, and inflame my desire,
Why should I decline what I cannot avoid,
And let pleasing hope by base fear be destroyed?

Her innocence cannot contrive to undo me;
Her beauty's inclined, or why should it pursue me?
And wit has to please been ever a friend;
Then what room for despair, since delight is love's end? ²⁶

(“The Submission,” 11. 5-12)

独り善がりの論理を行使して「悦びが愛の目的」と主張する口調は若者らしい直接さを響かせているが、独創性らしきものはこれといって見当たらない。あるいは何かしら粘液質めいた心理を伝える作品もある。

Melting joys about her move,
 Killing pleasures, wounding blisses.
 She can dress her eyes in love,
 And her lips can arm with kisses.
 Angels listen when she speaks;
 She's my delight, all mankind's wonder;
 But my jealous heart would break
 Should we live one day asunder.
 ("A Song," 11. 9-16)

“Killing” に二重の意味を持たせているのは言うまでもないが、大袈裟な誇張を用いた表現も当時の恋愛詩の常套手段と変わりはなく、やはり官能の悦びという主題を支えている。また時にはリベルタニらしさが大胆に、しかも卑俗なことばを吐き捨てることで表現される場合もある。

Cupid and Bacchus my saints are:
 May drink and love still reign.
 With wine I wash away my cares,
 And then to cunt again.
 ("Upon His Drinking a Bowl," 11. 21-24)

この一節における「不敬なる三位一体」への信奉には何の贅りもない。まさに陽気な放蕩者としての面目躍如といったところであろう。いづれにしてもこれらの作品は王制復古期における恋愛詩の一般的な傾向に吸収されてしまう程度のものであり、因襲の域を脱してはいない。

しかしながらロチェスターの個性は単にこうした面においてのみ規定されるものではない。彼の作品に見られる特徴は快楽、つまり官能的な充足感に対する執着さにある。これは部分的には他の詩人達と共通する性格なのだが、ただ彼らと決定的に異なるのは快楽への問い掛けを繰り返し行なっている点である。快楽のうちに安住してしまう精神はロチェスターにとって全く無縁と言うべきものであった。彼は私的な恋愛体験を描写しながら、同時にその意義を探究するという手法で詩を成立させている。即ち感情の激しさと分析的な態度との並存、そして緊張関係を彼の作品は孕んでいるのである。ロチェスターの作品群は、快楽という命題を巡って模索する詩人の精神の複雑な軌跡であった。

「快楽」を指す“delight,” “joy,” “pleasure”といった単語の頻出度の異常に高い事実によっても、それが裏づけられるであろう²⁷。

ロチェスターの特異さは、自己の感覚をなぜ充足させる必要があるのかという面において明らかに
なる。つまり快楽の定義づけを彼は意識的に試みているのである。

Beauty's no more but the dead soil which Love
Manures, and does by wise commerce improve.
Sailing by sighs, through seas of tears he sends
Courtships from foreign hearts. For your own ends
Cherish the trade, for as with Indians we
Get gold and jewels for our trumpery,
So to each other, for their useless toys,
Lovers afford whole magazines of joys.
But if you're fond of baubles, be, and starve;
Your gewgaw reputation still preserve;
Live upon modesty and empty fame,
Forgoing sense for a fantastic name.

(“The Advice,” 11. 39-50)

これは口説文句に耳を借さない女性を非難するという伝統に倣ったものである。但しこの明け透けな
論議があくまでも体面と感覚の悦びとの対比に依って提示されていることに注意したい。またこの一
節と似通った素材を扱っている作品もある。これもやはり高慢でつれない女性に恨みを述べるという
因襲に依っているのだが、詩人はさらに本当の名誉とは一体何かという議論を浴びせ掛けるのである。

I fall a sacrifice to Love,
She lives a wretch for Honor's sake;
Whose tyrant does most cruel prove,
The difference is not hard to make.

Consider real honor, then:
You'll find hers cannot be the same.
'Tis noble confidence in men;
In women, mean mistrustful shame.
(“Woman's Honor,” 11. 17-24)

こうして「愛の犠牲」たる男と「体面の奴隷」たる女との比較が、リベルタンの色彩の濃いことばながらも、「高貴な確信」と「卑屈で疑り深い恥辱」として理解されているのである。以上ふたつの例における詩人の論法を敷衍するなら、愛の素晴らしい喜びを拒絶するのは人間経験に対する冒瀆だということになる。これらの詩句を深刻に受け留めるのは無理だとしても、因襲に従っている口説き文句や捨て科白の背後に潜む、ある一貫した意志らしきものを読み取らねばならない。つまり感覚やその快楽を詩人は敢えて体面と対比させているのであり、それは人間経験の実体と見せかけとの対立ないしは矛盾を嗅ぎとろうとする精神と連絡している。

ロチェスターは自己の生における実体という問題に、生涯を通じて神経症的な固執を抱いていた。それは彼の一連の諷刺詩に最も顕著である。いつれの諷刺詩の場合でも中心になっているのは人間存在そのものに対する辛らつな批判であった。自分自身の主体性を顧みることなく、徒らに時勢に駆り立てられて流行を追い、空疎なものに支配されている同時代人の愚かしさにロチェスターは激しい呪詛を浴びせて止まない²⁸。時には人間の尊厳の根拠であると信じられていた理性さへ、皮肉な嘲笑の的になっている。

Our sphere of action is life's happiness,
 And he who thinks beyond, thinks like an ass.
 Thus, whilst against false reasoning I inveigh,
 I own right reason which distinguishes by sense
 And give us rules of good and ill from thence,
 That bounds desires with a reforming will
 To keep 'em more in vigor, not to kill.
 Your reason hinders, mine helps to enjoy,
 Renewing appetites yours would destroy.
 My reason is my friend, yours is a cheat;
 Hunger calls out, my reason bids me eat;
 Perversely, yours your appetite does mock:
 This asks for food, that answers, "What's o'clock?"
 This plain distinction, sir, your doubt secures:
 'Tis not true reason I despise, but yours.

("A Satyr against Reason and Mankind," 11. 96-111)

この一節で詩人は理性を所有していることを誇る人間達に向って、その理性が実は無意味な偽善に過ぎないと言い、彼らがいかに無批判に見せかけの世界に安住しているかを暴露している。その一方でロチェスターは感覚に基く「正しい理性」を持ち出し、快楽を求める自分の生活原理を讃美している。

リベルタンの生の哲学を表明すること自体、空疎なものへの痛烈な批判になっていたと言える。あるいは他の作品にも「淫らなことしか考えないが、口先ではしかめつらしく、信心深い」²⁹といった表面と実体との間の虚偽を突く端的な表現があるのも見逃せない。無意味にうごめくしかない人間を呪う諷刺詩、そこには詩人の理念が作用している。他者に対する批判的な精神は同時に自己にも係わってくるものである以上、それはロチェスター自身の生のあり方への問いを内包している。他者に対する視線と自己への省察は表裏一体をなすのであって、そこに詩人の諷刺詩と恋愛詩とを結ぶ論理の糸が潜在しているのである。ロチェスターは恋愛詩で個としての経験を描くことによって、彼の実体を求めた。

仮象と実在との乖離が十七世紀の人間に強く意識されたというのは良く知られているし、精神史上の分水嶺にあたるその時代を考察する際にも言及されることが多い。ロチェスターがその形而上学的認識を直接議論しているとは言えないけれども、彼の詩にはその片鱗が存在している。彼は実体（実在）と見せかけ（仮象）との矛盾を愛という経験の場で凝視しているのである。彼にとっての実体とは人間を意義づけるもの、生の証しとなるものであった。具体的に言うなら、肉体の欲望を充し、快楽をもたらす感覚が最深部において自己と一致すべき実体なのである。自我が強く出現する愛という経験で、感覚の直接的な説得力に詩人は全存在を委ねていた。この意味でロチェスターはリベルタンの発生を必然化した要因を敏感に、かつ正確に自分自身のものとして感じ取っていた唯一のリベルタンであったかもしれない。彼の快楽に対する執着さはひとえに生の実体を探ろうという態度に由来している。

詩的論理を展開する過程で自己の存在を確認しようとする姿勢は、逆説的な表現を借りることによって一層激しさを増す時があった。

Fantastic fancies fondly move

And in frail joys believe,

Taking false pleasure for true love;

But pain can ne'er deceive.

Kind jealous doubts, tormenting fears,

And anxious cares, when past,

Prove our herts' treasure fixed and dear,

And make us blest at last.

("The Mistress," 11. 29-36)

見せかけと実体とを識別する詩人の眼は鋭い。「真実の愛」を求めても「果敢無い快楽」に翻弄されるしかないような妄想を彼は否定している。恋愛体験において痛みを感じることに、その感覚は彼にとって真実のものであった。これは快楽を求める心理と相反する認識ではなく、むしろそれを補強する

役割を果たしている。愛の痛みは自己を苦しめるものである以上、それは自己を裏切りはしない。むしろその痛みの真実が実感されることによって、愛と快楽は詩人にとって享受すべき対象としての意義を増すのである。これらの詩句からも察せられるように、快楽を巡るロチェスターの精神は決して単純に割り切れるものではない。彼は快楽を追求することに内在している苦々しさを熟知していた。彼はその複雑な想いを牧歌の伝統に対するパロディという形式に託して述べてもいる。

STREPHON

Love, like other little boys,
Cries for hearts, as they for toys—
Which, when gained in childish play
Wantonly are thrown away.

DAPHNE

Still on wing, or on his knees,
Love does nothing by degrees:
Basely flying when most prized,
Meanly fawning when despised,
Flattering or insulting ever,
Generous and grateful never.
All his joys are fleeting dreams,
All his woes severe extremes.

(“A Dialogue between Strephon and Daphne,” 11. 17-28)

男と女の互いに不協和音だらけの科白は余りにも陰うつである。ロチェスターは愛において生じるさまざまな心理の性格を洞察する能力を所有していた。とするとこの対話は己れの実体を求めた詩人の精神の陰画になっているとは言えないであろうか。恋愛体験がいかなる意味を持つのかを理解しない時、それは文字通り「束の間の夢」に過ぎない。だがロチェスターはその逆の事実を充分承知していたのである。

人間経験における虚偽や見せかけを摘出する詩人であればこそ、充足を望む心は細やかなものになり得る。

Absent from thee, I languish still;
Then ask me not, when I return?
The straying fool 'twill plainly kill

To wish all day, all night to mourn.

Dear! from thine arms then let me fly,
That my fantastic mind may prove
The torments it deserves to try
That tears my fixed heart from my love.

When, wearied with a world of woe,
To thy safe bosom I retire
Where love and peace and truth does flow,
May I contented there expire,

Lest, once more wandering from that heaven,
I fall on some base heart unblest,
Faithless to thee, false, unforgiven,
And lose my everlasting rest.

(“A Song”)

これは快楽の度合いを高めるべく計算された作品であり、不実を肯定するリベルタンの弁明という背景に照らし合わせて読まれるばかりでなく、同時にそれに対する論評としても読まれるべきだという意見がある³⁰。確かにこの詩は官能の悦びを願うリベルタンの屈折した心理状態を如実に表現している。しかしながら、それは実体のない快楽との対比によって示される、ひとりの女性への思慕の念に由来しているはずである。その優しさが作品全体に透明感を与えているとも思われる。

個としての人間が快楽を通して、ある種の絶対へ到達することを望む心は『愛と生 (“Love and Life”)』において静かに語られている。

All my past life is mine no more:
The flying hours are gone,
Like transitory dreams given o'er
Whose images are kept in store
By memory alone.

Whatever is to come is not:
How can it then be mine?

The present moment's all my lot,
And that, as fast as it is got,
Phyllis, is wholly thine.

Then talk not of inconstancy,
False hearts, and broken vows;
If I, by miracle, can be
This livelong minute true to thee,
'Tis all that heaven allows.

この詩は真面目な作品なのか、それともリベルタンの自己弁護になっているのか議論が分かれるところである³¹。形式上から言えば、巧妙極まりない誘惑の詩として見ることも可能であるし、むしろそれが自然な読み方かもしれない。しかしそうした問題以上に、この詩が無常という観念に支えられて成立していることの方が留意されるべきであろう。時間に支配され、仮象の世界に彷徨するしかない人間の宿命的な状況を詩人は明確に把握している。その前提のもとで、過去と未来を、そしてそれらにおける経験を敢えて拒絶し、現在にだけ生を限定することで現在の快楽を享受しようというのである。存在の拠りどころを喪失した人間にとって間違いなく確かなものといえ、それは自己を決して欺かない現在の感覚とその充足による快楽だけしかない。誇張的表現の効果を発揮した論理は所謂 *carpe diem* とは異質なのであって、たとえ一瞬でも存在の基盤を確実にしようとする精神に収斂していく。愛する者の腕の中に見た人工楽園に縋りつく姿は印象的ですからある。詩人の求めた生の実体はこの一瞬の充足のうちにしかなかった。自己に直接係わる実在と仮象との相剋——これがロチェスターの詩的想像力の核であり、作品における抒情性の頂点をその限界を示すものであった。

V

直前に用いた限界ということばは、ひとりの恋愛詩人としてのロチェスターをどのように評価すべきかという問題と関連している。A. J. スミスはルネサンスの恋愛詩群が男と女の間を描くと同時に普遍的な真理、あるいは形而上的な観念と対峙する人間を表現していたと述べた上で次のように言っている。即ちダン以後、殊に王制復古期の恋愛詩では「愛が両性相互の性的な情念に、また性的な充足への希求になっていた」と³²。スミスはこの点でロチェスターに限らず王制復古期の恋愛詩全体に愛の衰退という現象を見ているのだが、その意見が適切なのは言うまでもないし、そればかりかひとつの価値判断にもなっている。だがスミスの見解とは異なった側面からロチェスターの意義を問うのは可能であろう。それを提示することで結論に代えたいと思う。

ロチェスターの作品には唯ひとつの例外を除いて、恋愛体験の臨床的な記述が存在していない。しかもその例外さへ、愛の行為が未完に終わった不如意を戯れに嘲笑することを主題にしている³³。換

言するなら、ロチェスターは愛のエクスタシスを表現してはいないのである。彼が快楽に固執したことを考える時、これは決して無視できない事実であろう。ここで人間としての地平から官能の悦びをうたった詩人ダンを参照するのもあながち無理なことではないと思われる。ダンの恋愛詩には両性が相互の牽引と葛藤を経た果てに到るエクスタシスが確固として存在している。即ち男と女は互いに深く触れ合いながら快楽の絶頂に達し、個としての限界を越えて激しく合体することでエクスタシスを迎えるのである。ダンの言う快楽とはエクスタシスの一瞬において両性が作用し合い、それぞれの可能態を現実態に高めることであって、人間存在の永遠像を創造する行為であった³⁴。愛における快楽が他者との相互の快楽の関係に入ることだとすると、それは究極的にはエクスタシスという状況において完結する。ところがロチェスターは快楽ということばの領域にのみ終始しているのである。

感覚とその充足による快楽の現在性に自己の生の証しを求めたロチェスターは、個としての人間の快楽体験が完結すべきエクスタシスの意味を知らなかった。彼の説く快楽は何ものにも優先して直接的に作用するものである以上、それを享受する瞬間においては皮膚感覚の真実として理解される。しかしながら人間経験において自己に係わる快あるいは不快を重視している精神は、エクスタシスと無縁である限り、具体的に感じられるその真実を新たな生の認識へと発展させ得ないのである。ロチェスターの見出した彼の存在の実体は必然的に現在という一瞬においてしか意義を持ち得ない。彼は現在進行形という条件でしか理解されない感覚の充足に拘泥するばかりであった。彼の恋愛詩には人間経験を通して人間の永遠像を創造する行為が不在なのである。彼の作品を読み進むうちに感じないではいられない線のか細さは恐らくこうした事情に由来しているものと考えられる。恋愛体験における快楽の価値を強調しながらも、それがエクスタシスと連続していないことは、一箇の恋愛詩人として見た場合、ロチェスターにとって致命的な限界ではなかったであろうか。彼の作品群は愛の行為を強靱にうたい上げる精神からは遠く隔ったところで成立したのである。

王制復古期にあって、リベルタンの大半が放らつな生活を標榜し、快楽に埋没していたのとは異なり、ロチェスターは自己の生の実体を模索し続けたのである。だが快楽へと向う彼の姿勢は、やはり過渡期という脈絡によって決定されていたと言える。その点からすると、伝統的な価値観の崩壊にさらされていた時代と深層において係わりを持っていたリベルタンとして、彼の個性の輪郭は顕著なものとなる。ロチェスターは王制復古期に存在すべく運命づけられ、そして確信に満ちた表現を残さないうまま死んだのである。彼自身が予言したように、「この世の屑片」³⁵として。

註

- 1) J. H. Wilson, *The Court Wits of the Restoration* (1948; rpt. New York: Octagon Bks., 1967), P. v. なお James Sutherland, *English Literature of the Late Seventeenth Century* (Oxford: Clarendon Press, 1969), p. 169. にも同様の指摘がある。
- 2) John Evelyn, *The Diary of John Evelyn*, ed. E. S. de Beer (London: Oxford Univ. Press, 1959). はロンドン市民の熱狂的な歓迎風景について “The wayes straw'd with flowers, the bells ringing, the streetes hung with Tapissry, fountaines running with wine:” と1660年5月29日付の日記に書いている。
- 3) 当時の社会的・政治的状況については, Sir George Clark, *The Seventeenth Century* (1929; rpt. London: Oxford

- Univ. Press, 1960); _____, *The Later Stuarts, 1660-1714*, 2nd ed. (Oxford: Clarendon Press, 1964). を参照。
- 4) *The Diary of Samuel Pepys*, ed. J. Warrington, 3 vols. (London: Dent, 1906) の例えば, 1662年12月25日, 63年7月3日, 63年12月9日などの記述を参照のこと。
 - 5) ビーブスの日記に呼応するかのように, チャルズ二世に対する諷刺詩が数多く書かれている。なおそれらのうち何篇かは *Anthology of Poems on Affairs of State*, ed. G. deF. Lord (New Haven: Yale Univ. Press, 1975); *Court Satires of the Restoration*, ed. J. H. Wilson (Columbus: Ohio State Univ. Press, 1976). などに収録されている。
 - 6) *OED*, *Libertine* の項を参照。放蕩者を意味する用例として, 王制復古期の喜劇から二箇所を挙げておく。
“... What, all the libertines of the town...” — William Wycherley, “The Country Wife,” II. i, *Three Restoration Comedies*, ed. Gámini Salgádo (Harmondsworth: Penguin Bks., 1968), P. 171; “You are a libertine in speech as well as practice.” — William Congreve, “Love for Love,” III. i, *ibid.*, p. 322. なお “libertine” をリベルタンとしたのはフランス語の *libertine* の発音をそのまま日本語で表記する慣習に従ったからである。
 - 7) D. Farley-Hills, *The Benevolence of Laughter* (London: Macmillan, 1974), PP. 184-192. を参照。
 - 8) 例えば James Sutherland, *English Literature of the Late Seventeenth Century*, op. cit., pp. 13-14, など。
 - 9) ロチェスター自身の諷刺詩 “Tunbridge Wells,” 11. 35-36. を参照。
 - 10) 王制復古期の諷刺詩や喜劇の各処に描かれている。それらの人間を最も激しく呪ったのが, 他ならぬロチェスターであった。
 - 11) *Anthology of Poems on Affairs of State*, op. cit., P. 179.
 - 12) *The Penguin Book of Restoration Verse*, ed. H. Love (Harmondsworth: Penguin Bks., 1968), P. 42.
 - 13) V. de Sola Pinto, *Enthusiast in Wit* (London: Routledge & Kegan Paul, 1962), pp. 26-29 に依れば, 当時の貴族階級は1651年に出版されたホブスの『リヴァイアサン』を競って愛読し, その主題とは関係なく, 例えば “of Pleasures, or Delights, some arise from the sense of an object Present; And those may be called *Pleasures of Sense*, (The word *sensuall*, as it is used by those onely that condemn them, having no place till there be Lawes.)” — *Hobbes's Leviathan* (Oxford: Clarendon Press, 1909), p. 42. などの箇所合理化されたリベルタンの自己弁護を読み取ったという。けれどもこの指摘を鵜呑みにするのは危険だと思われる。
 - 14) *The Poetical and Dramatic Works of Sir Charles Sedley*, ed. V. de Sola Pinto, 2 vols. (London: Constable, 1928), Vol. I, p. 19.
 - 15) “A Letter to Lord Middleton,” 11, 25-26, *The Poems of Sir George Etherege*, ed. J. Thorpe (New Jersey: Princethon Univ. Press, 1963), p. 46,
 - 16) “Song,” 11. 1-2, *ibid.*, p. 28.
 - 17) J. H. Wilson, *The Court Wits of the Restoration*, op. cit., p. 16.
 - 18) J. Sutherland, *English Literature of the Late Seventeenth Century*, op. cit., p. 26.
 - 19) “The Secular Mask,” 11. 39-40. なおこれは V. de Sola Pinto, *The Restoration Court Poets* (London: Longman, 1965), p. 7; E. Miner, *The Cavalier Mode from Jonson to Cotton* (New Jersey: Princeton Univ. Press, 1971), p. 209. に引用されている。
 - 20) *The Penguin Book of Restoration Verse*, op. cit., p. 136.
 - 21) *Ibid.*, pp. 181-182.
 - 22) *The Cavalier Poets*, ed. R. Skelton (London: Faber and Faber, 1970), p. 115.
 - 23) *The Poems of Sir George Etherege*, op. cit., p. 23.
 - 24) R. Trickett, *The Honest Muse* (Oxford: Clarendon Press, 1967), p. 106.
 - 25) *The Cavalier Poets*, op. cit., p. 40.
 - 26) ロチェスターの詩からの引用は *The Complete Poems of John Wilmot, Earl of Rochester*, ed. D. M. Vieth (New Haven: Yale Univ. Press, 1968). に依る。ロチェスターの定本を呼べるものは未だ現われていないし,

今後もその可能性は少ないと思われる。Vieth 版は、現在のところ最も信頼できるテキストであろう。なお他に参照した版を列挙しておく。John Wilmot, *Earl of Rochester: Poems on Several Occasions* (1680 ? ; rpt. Menston: Scholar Press, 1971); *Collected Works of John Wilmot, Earl of Rochester*, ed. J. Hayward (London: Nonesuch Press, 1926); *Poems by John Wilmot, Earl of Rochester*, ed. V. de Sola, Pinto (London: Routledge & Kegan Paul, 1953); *The Gyldenstolpe Manuscript Miscellany Poems of John Wilmot, Earl of Rochester and other Restoration Authors*, eds. B. Danielsson and D. M. Vieth (Stockholm: Almqvist & Wiksell, 1967).

- 27) Vieth 版に収録されている 76 篇の詩において、筆者の数えた限りでは（見落としがあるかもしれないが），“delight” は 6 回，“joy” と “pleasure” は 各 27 回 使用 されている。それらの動詞形や形容詞形、あるいは “enjoyment” などを加えると相当な数に昇る。
- 28) 王制復古期を生きた伝記作者 John Aubrey は次のように書いている。“Mr Andrew Marvell (who was a good judge of Witt) was wont to say that he [Rochester] was the best English Satyryst and had the right veine,” ——— *Aubrey's Brief Lives*, ed. O. L. Dick (Harmondsworth: Penguin Bks., 1962), p. 481.
- 29) “Bawdy in thoughts, precise in words” ——— “On Mrs. Willis,” l. 17. なお “precise” の十六世紀、十七世紀における特殊な用法については *OED*, *Precise*: 2. b. を参照。
- 30) D. H. Griffin, *Satires Against Man* (Berkeley: Univ. of California Press, 1973), p. 110.
- 31) 前者の説を唱えているのは V. de Sola Pinto, *Enthusiast in Wit*, op. cit., pp. 58-59; D. Farly-Hills, *The Benevolence of Laughter*, op. cit., pp. 147-148. であり、後者と見ているのは J. H. Wilson, *The Court Wits of the Restoration*, op. cit., p. 97; D. H. Griffin, *Satires Against Man*, op. cit., pp. 111-112. などである。
- 32) A. J. Smith, “The Failure of Love: Love Lyrics after Donne,” *Metaphysical Poetry*, eds. M. Bradbury and D. Palmer (London: Edward Arnold, 1970), p. 66.
- 33) “The Imperfect Enjoyment” がそれである。
- 34) この点に関する詳細な論議については拙稿「ヘルマフロディトスの姿貌——ジョン・ダンの恋愛詩をめぐって」(『日本大学工学部紀要』第十七巻, 1976年)を参照されたい。
- 35) 原文は “Dead, we become the lumber of the world,” ——— “A Translation from Seneca's ‘Troades,’ Act II, Chorus,” l. 8.